

神による平和

中等部宗教主任
浅原 一泰
ASAHARA Kazuyasu



「平和とは何か」。ロシアによるウクライナ侵攻が始まって以来、誰もが深刻に考えさせられ続けている。では聖書は何を語るのか。二千年前、憎しみも争いもない神の国の始まりとしてキリストは世に教会を残した。しかし皮肉にも現実の教会は争いを繰り返していく。宗教改革の発端となった免罪符はヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂を改修建築するための資金を賄うためにばらまかれたものであったが、それが神の御心に反していると信じたマルチン・ルターが1517年に95カ条の提題を張り出したことで宗教改革が始まった。それまでも、教会の歴史において十字軍、異端審問や魔女狩りなどによって実に多くの血が流されてきたが、宗教改革でもシュマルカルデン戦争やユグノー戦争な

ど、分裂したカトリックとプロテスタントとの間で多くの血が流れる争いの火蓋が切られた。「戦争を予防できれば良い」という問題ではなく、「自分たちこそが純潔で正しく、考えの違う者は汚れている」と叫んで異分子を排除しようとする排他的な考え方がそれらの争いの発端ではなかったか。排他的思考はいつの世も人間の心を蝕（むさ）もうとする。陰口や言いがかりによって意見の違う者を貶め（せし）ようとする戦いは、子どもから大人まで人間の集まる至るところで発生する。

その排他的精神はヨーロッパにおいてユダヤ人に向けられてきた。かつて母国がなく異国の地で生きなければならなかったユダヤ人に対し、ヨーロッパのキリスト教世界は彼らを排

除し続けた（アンチ・セミティズム）。19世紀末期、ユダヤ教とキリスト教とが共に神を褒めたたえる未来を追求する理想を死守しながら波乱の時代を生き抜いた人物の中にマルガレーテ・ブースマンがいる。ドイツ在住のユダヤ人思想家であった彼女は、ユダヤ人であってもドイツの精神を受け入れようとする作曲家メンデルスゾーンに賛同するが、歴史は余りにも皮肉であった。時を同じくしてナチスが政権を握ったことによって、現実にはメンデルスゾーンたちの思いを粉砕したからである。ヒトラーは、ユダヤ人はキリストを十字架につけた張本人でありその血の責めを負わなければならない（マタイによる福音書第27章24節）という聖書の言葉を利用し、ユダヤ人を収容所へ放り込んでガ

ス室に送る路線へと舵を切る。そしてヒトラーを恐れる余りに権力に迎合した当時の多くの教会もこれを容認する。そのような教会の過ちをかつて旧約の預言者エレミヤはこう予告していた。「小さな者から大きな者に至るまで皆、暴利を貪（むさ）り預言者から祭司に至るまで皆、虚偽をなす。彼らは、わが民の傷を安易に癒やして『平和、平和』と言うが、平和などはない」（エレミヤ書第6章13―14節）。

人間が本来の意味をそのように歪曲してしまふ真の平和について、聖書はこのような語りかけてくる。「キリストは、私たちの平和であり、二つのものを一つにし、ご自分の肉によって敵意という隔ての壁を取り壊し、数々の規則から成る戒めの律法を無効とされました。こうしてキリストは、ご自分において二つのものを一人の新しい人に造り変えて、平和をもたらしたださいました。十字架を通して二つのものを一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼしてくださったのです」（エフェソの信徒への手紙第2章14―16節）。

ここで聖書は、平和とはもともと人間が知っているものでも手にしていたものでもなく、むしろ人類にとって未知なるものであり、「キリストが私たちの平和だ」と断言する。キリストは罪ある人間すべてを救うために人となつてこの世に來られた神である。そのキリストが一つにする「二つのもの」の一方は自分、もう一方は敵を指していると言つて良いだろう。この言

葉が書かれた当時はユダヤ人と異邦人、ブースマンの時代であればユダヤ人とナチス・ドイツを指し、今のウクライナではウクライナ人とプーチンを支持するロシア人に当てはまると言えるのかもしれない。いずれにせよキリストは十字架を通して二つのものを一つにし、敵意を滅ぼされたと聖書は告げる。その十字架で何が起こつたのか。人となつた神キリストは罪を犯さなかつた唯一の人間である。しかしこのキリストを十字架にかけることで神はあたかもキリストの敵のように振る舞つた。それが想像を絶するほどの苦しみであつたからこそ、キリストは十字架の上で「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになつたのですか）」と叫んだ（マルコによる福音書第15章34節）。

しかしこの時、キリストを十字架にかけることで神は罪を封じ込めたのではなかったか。罪とは神に対する敵意である。それは初めの人間アダムが神に背いたことから全人類を蝕み、この罪が神との関係や隣人との関係を壊し、人間を憎しみ、敵意、戦争へと駆り立てる。罪の最終目的地は死である。神への敵意など一切ないキリストをその死へと追いやってまでして神は、人間すべてを蝕む罪をキリストに負わせキリストを徹底的に見捨てた。しかし同時に神は、キリストを見捨てたようには誰をも決して見捨てないという断固たる決意をあゝの十字架の場面で示したのではなかったか。「エロイ、エロイ、

レマ、サバクタニ」とキリストに叫ばせることで、罪ある人類すべてに向かつて神は語りかけ続けている。「私は決してあなたを見捨てない。インマヌエル、私はあなたと共にいる」のだとこれこそがまさしく神による平和ではないだろうか。それはアダムから始まつた神との関係の破れを縫ひ直して余りあるものであり、それがあつてこそ隣人との平和へと導かれる。ユダヤ人であろうがドイツ人であろうが、ウクライナ人であろうがロシア人であろうが、敵味方を超えてそのことを信じて神と共に生きる命を、まさしく新しい人間を、敵意に蝕まれていた人類の只中から生まれさせてくださる。十字架の上で起こつていたのはこの神の業ではなかったか。神が一人一人に与えた命は、それを蝕む罪によつて死で終わるものへと貶められている。命へと導くはずの神の律法が、容赦なく人を裁き罪と定める戒律づくめのものになつている。敵味方を超え憎しみを超えて共に手を取り神を褒めたたえることこそが真の平和であるのに、取り敢えず戦争がないことや死なずに済むことが平和であるかのように誤解し、平和がないのに平和、平和と思ひ込まされている。だからこそ神はキリストを死からよみがえらせることで罪と死を打ち滅ぼし、誰もが敵味方なく互いに愛し合い神をたたえる真の平和なる神の国を始めてくださっている。その完成を信じて待ち望む者へと変えられたい、そう切に祈る者である。